

未来社会を見据えた人とデジタルの関係の在り方に関する研究会（第5回）

議事要旨

1. 日時 令和8年8月4日（火） 16:00～18:00

2. 場所 オンライン

3. 出席者

（1）構成員

高橋座長、辻座長代理、生貝構成員、大山構成員、小塩構成員、小塚構成員、標葉構成員、野田構成員、藤本構成員、宮田構成員、矢野構成員

（2）総務省

河野大臣官房審議官、寺岡情報通信政策課長

岡本情報通信政策研究所長、神保情報通信政策研究所調査研究部長 ほか

4. 議事

（1）第4回会合におけるワークショップ議論（まとめ）

（2）意見交換

（3）人とAIのあるべき関係 「人間失業」に抗して

（出口康夫 一般社団法人京都哲学研究所共同代表理事/京都大学人と社会の未来研究院特定教授 御発表）

（4）職業生活ウェルビーイングの現在地

（井上亮太郎 株式会社パーソル総合研究所シンクタンク本部上席主任研究員 御発表）

（5）意見交換

5. 議事概要

議事次第に沿って、事務局説明にて第4回会合におけるワークショップ議論のまとめについて確認した後、各登壇者からの御発表と意見交換を実施した。概要は以下の通り。

【発表及び質疑の内容】

① 第4回会合におけるワークショップ議論（まとめ）について

- ◆ ワークショップの全体概要と、議論から抽出した社会に求める変化について説明。
- ◆ ワークショップ議論を踏まえ、構成員間の議論に資するよう、事務局から論点整理のたたき台を提示。（以上事務局）
- 多様な個性を持つ一人一人の違いを認め合う社会という観点を、明示的なキーワードとして盛り込んでほしい。（大山構成員）
⇒ 一人一人の違いを認められるとの要素について、今後の資料や議論に反映していけるよう座長とも相談して進めていく。（事務局）
- AIのパーソナライズ技術を活用して個人の不足を補う「公平性」をどう担保するかという観点が、幸福や活用の在り方を議論する上で重要ではないか。（小塩構成員）
⇒ 今後資料等に反映させるように調整する。（事務局）
- AIへの信頼のあり方についてさらに場合分けや議論を深めつつ、社会像の整理も含めて今後ワークショップ等で再度検討できるとよい。（藤本構成員）
⇒ 限られた時間での結論は難しいため、今回の成果をたたき台としてフォーカスすべき点を皆で相談しながら進めていきたい。（高橋座長）
- デジタル格差の議論はアクセスの有無だけでなく、利用の度合いや様態が格差につながるという最近の研究動向を踏まえ、アクセスに限定しない表現に修正してほしい。（辻座長代理）
⇒ アクセスの有無だけでなく、リテラシーや課金による情報格差など重層的なデジタル格差について今後しっかり議論していきたい。（高橋座長）
- 2050年の未来像は社会の選択次第であり、個人・産業レベルでできることと公共として取り組むべきことを分けて議論することが重要。また、（資料にある「自分で考える力が身につく環境」と「AIに依存して考える力が身につかない環境」という二極について）AIによる意思決定への介入・操作の可能性を認めつつも、それを闇雲に恐れるのではなく、2050年においても人間として守るべき価値・意思決定の本質を改めて確認していくことが重要。（小塚構成員）
- ハイブリッド開催でのオンラインと対面のコミュニケーションギャップを実感し、デジタルと対面の関わり方の差を埋めることが今後の議論において重要。（宮田構成員）

② 人とAIのあるべき関係 「人間失業」に抗してについて

- ◆ AIは一旦出てきてしまえばもう引き返せない制御不可能な形で社会を不可逆的に変える「できちゃった系テクノロジー」であり、知的能力の代替を通じて人間の存在意義や尊厳を脅かす「人間失業」という実存的問題を引き起こしている。
- ◆ 「できなさターン」として、人間のかげがえのなさを「知的にできること」ではなく「根源的なできなさ」に置き換え、誰もが単独では行為できないという前提から、あらゆる行為の主体を「I」ではなく「WE」として生きることと捉えなおしていく「WEターン」という哲学システムを提唱している。
- ◆ 人間とAIの望ましい関係は、人間が一方的に支配する主人－奴隷モデルであらわされる「人間中心のAI」ではなく、主導権が双方向にアジャイルに行き来する「フェロシップモデル」であり、中心を誰も占有しないことでWEのメンバー間で双方向性・対称性が確保された「中空的WE」というあり方が理想である。
- ◆ 人間とAIはそれぞれ異なるバイアスを持つ認知主体であり、両者が協働して互いのバイアスを相殺し合うことで、シンギュラリティ後も人間の知的活動における役割は不変・不滅であると考えられる。(以上発表者)
- AIとのポジティブな関係性を示す先生の考え方に共感しつつ、AIに支配されるという不安を持つ人が多い中で、なぜそうした考え方が広まりにくいのか、またどうすれば広まるのかについて御意見を伺いたい。(大山構成員)
 - ⇒ ウェルビーイングを損なう「悪いAI」(行動中毒を引き起こすショート動画等)が存在する中、たばこ規制のように時間をかけて何が悪いAIかを見極め、そうしたAIを作らない社会設計が必要。
- 日本が掲げてきた「人間中心のAI」という理念は、非対称で一方的な関係である「中心占有的な悪いWE」の観点からすると間違った方向性だったのか、また悪いAIを社会として排除するという考えとどう整合するのかを伺いたい。(小塚構成員)
 - ⇒ 「人間中心のAI」という理念は近代ヒューマニズムに基づく中心のゼロサムの発想であり、内容は正しいが、そのメタファー自体が環境破壊等の近代の負の側面を生んできたため、人間を大切にするという本質は守りつつ、中心占有的でない新たな思考法・表現に変えていくことが重要。
- AI社会において人間が「問いを立てる力」や高い知性を身につけるために、2050年

に向けて高等教育機関、特に大学院やリカレント教育はどのような役割を果たすべきかについてお考えを伺いたい。(生貝構成員)

⇒ AI時代における査読制度の崩壊など学問・教育の既存システムが破壊的変革にさらされている一方、大学の知を本当に必要としているのは社会で働く人々であり、高等教育のリカレント化は不可避の流れであるところ、破壊の後に創造が生まれるかが今後の課題。

- 人間はAIに対しても容易に信頼を寄せてしまう可能性があり、むしろAIのほうが信頼を誘発しやすい存在になり得るとすれば、「意味・信頼・共創は人間同士で育まれる」という前提を再考する必要があるのではないか、またそれは「中心占有的な悪いWE」の観点からどう捉えられるか伺いたい。(標葉構成員)

⇒ 真の信頼関係はゼロサムの利害関係を越え、共同行為の中でリスクや危機を共に経験し乗り越えることで生まれるものであり、これは人間同士に限らずAIとの関係にも拡張し得る。

- 「WE」とそれ以外の存在である「THEY」(敵と味方に分けることを想起)の境界線はどのように決まるのか、またAIを含む知的存在との関係において「WE」の範囲をどう考えるべきかについて伺いたい。(辻座長代理)

⇒ 「WE」のメンバーシップの条件はある身体行為にとって「必要不可欠なエージェントであること」であり、境界は存在論的には存在するが認識論的には明確に引けないような人間以外のエージェントや過去の人間も含む広がりを持つものの。

- AI企業が哲学者を雇用し始めている理由についてお考えを伺いたい。(矢野構成員)

⇒ AI企業が哲学者を雇用するのは、科学が事実を明らかにする一方で、現在、技術の最前線で自明だった価値が見えなくなっているところ、哲学は2500年分の価値の提案のためのボキャブラリーを持っているからではないか。

- 現在の子供たちを含む社会は「できること」に自己肯定感の根拠を置いているが、それを「できなさ」に転換するためには、具体的にどのように向き合い、捉え直していけばよいかを伺いたい。(野田構成員)

⇒ できることを伸ばす教育は重要だが、それだけでは誤った優越感や劣等感を生むため、共同身体行為を通じて「1人ではできない」という根源的なできなさを全員が体感できる機会を教育に取り入れ、みんなが平等にできなさを抱えて

いるからこそ「WE」として生きているという実感を育てることが重要。

③ 職業生活ウェルビーイングの現在地について

- ◆ 職業生活ウェルビーイングとは「仕事に満足し、社会とのつながりや貢献・喜びを感じながら、自分で働き方を決められている状態」であり、個人の成果・成長の土台であるとともに、組織パフォーマンスや企業価値創造の前提条件でもある。
- ◆ 働くことは基本的に幸福度をネガティブに振れさせる傾向があるが、自己成長・役割認識・他者貢献といった因子が実際の幸せ実感と強く関連しており、リフレッシュや負荷軽減だけに注目する「フォーカシング・イリュージョン」に陥らないことが重要である。
- ◆ 仕事と私生活のバウンダリーが曖昧になる中、「働く」を単一組織内の活動としてではなくポートフォリオ全体として捉え直し、そのバウンダリーを主体的にコントロールすることが人生満足度やウェルビーイングの向上につながる。
- ◆ AIが生み出す余白を、単に負荷軽減につながるものと捉えるのではなく、その余白を使って意味ある形の再投資につなげることが重要であり、AI時代には自律性・判断主体性・人間同士の意味の共創といった要素がウェルビーイングの中核となっていく。(以上発表者)
- AIとのポジティブな関係性を示す考え方に共感しつつ、AIに支配されるという不安を持つ人が多い中で、なぜそうした考え方が広まりにくいのか、またどうすれば広まるのかについて御意見を伺いたい。(大山構成員)
⇒ AI導入による不安は移行期的な混乱として理解できるが、人はその環境に適応しながらウェルビーイングの形を更新していくため、時代に応じた新しいウェルビーイングが見いだされていくのではないかと。
- AIによる業務効率化で生まれた余白や利益を雇用主と被用者の間でどう分配するか、そのルールを誰がどのように決めるべきかについてお考えを伺いたい。(小塚構成員)
⇒ AI活用による利益分配のルールは一律には決まらず、労働力不足の中で企業ごとに高給与・好待遇・独自の働き方など異なる特色がより際立っていき、働く人が企業を選ぶ形で自然と分配のあり方が多様化していくのではないかと。
- AI社会において人間が「問いを立てる力」や高い知性を身につけるために、2050年

に向けて高等教育機関、特に大学院やリカレント教育はどのような役割を果たすべきかについてお考えを伺いたい。(生貝構成員)

⇒ 高等教育機関には高度な学術的知性を培う役割だけでなく、年齢を問わず知的好奇心を楽しみながら居場所やコミュニティを見いだせる場としての役割も重要になってきていると考える。

- 人間はAIに対しても容易に信頼を寄せてしまう可能性があり、むしろAIのほうが信頼を誘発しやすい存在になり得るとすれば、「意味・信頼・共創は人間同士で育まれる」という前提を再考する必要があるのではないか、またそれは「中心占有的な悪いWE」の観点からどう捉えられるか伺いたい。(標葉構成員)

⇒ AIへの信頼も成立し得るという指摘を認めつつも、摩擦や揺らぎを経て強化される人間同士のリアルなつながりこそがウェルビーイングの重要な要素であり、そこに希望を見いだしたいと考える。

- AIが余白をもたらすと言われるが、PCや携帯の進化でも社会全体が暇になったわけではなく、AIによる効率化も新たな期待値や仕事量の増加に吸収されてしまうのではないか。本当に社会全体として余白が生まれるのかについてお考えを伺いたい。(藤本構成員)

⇒ AIによる余白は自然に生まれるものではなく、技術の進化で仕事量が増えてきた歴史と同様に流されてしまいがちであるため、余白を意識的に作り活用する主体性や思考特性を教育・スキルとして意図的に育てていくことが重要。

以上